「4・4・4」一足先に

一部の私立校で導入進む

異学年交流でリーダー経験

「中1ギャップ」つまずき防ぐ

政府の教育再生実行会議で進む学制改革の議論。小中高校を「6・3・3」で区切る現在の制度を、子供の成長の早まりに応じた形に改めるのが狙いだ。一部の私立校は一足早く「4・4・4」制に基づく指導を導入。中学校教員が小学生を教えるほか、異学年交流も取り入れ、学力やコミュニケーション能力の向上に取り組んでいる。

「結果だけじゃだめ。なぜそうなったのか考えて」。1月下旬、玉川学園（東京都町田市）の小学5年生の理科の授業で、田原剛二郎教諭が児童32人に呼びかけた。コイルの巻数で磁力が変わる電磁石の実験。生徒は実験後、グループごとの考察結果を発表した。

田原教諭の専門は中学理科だが、2013年度から5年生も担当。「自分の考えをまとめるのが苦手な中学生が多い。小学生のころから発表の場を設け学習意欲を刺激したい」と話す。

小中高一貫校の玉川学園は06年度、児童生徒の教育課程を「小1～4」「小5～中2」「中3～高3」で分け、それぞれが異なる校舎で学ぶ「4・4・4」制を導入。学習指導要領の規定を超えない範囲で独自の指導内容を採用している。

□ □ □

「心身の発達が早まり、思春期特有の問題を持つ年齢が変わってきた」というのは酒井健司教育部長。小5～中2にあたる学年が担当の酒井部長は「成長に合わせて4・4・4に再編したことで、中学進学の際、環境になじめずに不登校などに陥る『中1ギャップ』もなくせる」と話す。

高校生活を充実させる狙いもある。石塚清章理事は「高校が3年間だと、入学し慣れたと思ったら受験勉強が始まる。導入後は中3から大学進学を見据えた指導ができ、子供たちに将来を考える余裕が生まれた」と強調。海外研修や大学講義の受講も推奨し「進路に悩む子は減った」という。

小中高の教員を集めた研修会も頻繁に開き、教員の意識も変わった。「小学生には図で説明すると効果的」「この分野は中学でつまずく子が多い」。互いの指導方法を披露し合うことで「子供の情報を共有し、指導に役立てやすくなった」と石塚理事は話す。

1年生㊨は4年生の隣の机で勉強している（1月、さいたま市）

□ □ □

新しい区切りを活用した異学年交流に力を入れるのが開智学園（さいたま市）。年齢の異なる集団の中で人間関係を学ばせるため、04年に「4・4・4」の小中高一貫コースを開設した。

「小1～4」「小5～中2」で異学年学級を編成。各学年から約10人ずつを集め、計40人程度がクラスをつくる。主要教科は学年ごとに学ぶが、給食やホームルームのほか、演劇発表会、球技大会などは異学年学級で取り組む。

例えば「小1～4」の学級では5人程度の班を作り、4年生が1年生の隣に座るよう席を配置する。「一番上の学年はクラスに10人程度しかいないので、皆がリーダーを経験でき、年長者としての自覚が生まれる」と那須野泰校長。

中2にあたる8年生の菊地渉君（14）は「指示が伝わらないとクラスがまとまらない。年下の子には個別に教えるなど工夫している」と話し、5年生の小宮南泉さん（11）は「自分も将来は丁寧に教えられる先輩になりたい」と笑顔を見せる。

那須野校長は「年齢を超えたコミュニケーションの方法を身につけるには、中2ごろまでの教育が重要。立場の異なる人を思いやる力を育てることで学力向上にもつながる」としている。

早まる子供の発達時期

教員養成・施設…ハードル高く

米国をモデルに1947年に導入された現在の「6・3・3」制。抜本改革が議論されるようになったのは、子供の心身が当時よりも2歳ほど早く成長するようになったためだ。

白梅学園大の無藤隆教授（発達心理学）によると、男子の身長が最も伸びるのは1948年は14～15歳だったが、2012年は12～13歳。平仮名を読める段階も2歳ほど早くなっているという。

下村博文文部科学相は「子供の発達段階を考えると（6・3・3制が）適切なのか考える時期にきている」と改革に意欲を見せるが、70年近く続く学制の見直しは容易ではない。

学校教育法は小中高校の修業年限を6年、3年、3年と規定、変更には法改正が必要だ。教育課程を独自に区切る一部私学も卒業認定は「6・3・3」を守らねばならない。大学の教員養成課程の見直しや、新たな学制に対応した校舎の新設なども課題となる。

こころの一冊

自然の循環捉え 豊かさ知る

畠山重篤・著、スギヤマカナヨ・絵、小学館、1365円

「鉄は魔法つかい」

カキ養殖業の家で育った著者は、子供のころ研究者から、腐葉土はカキの生育に良い、なぜなら「森には魔法つかいがいる」からだと聞いて驚きます。そして30年後、その魔法使いの正体が「鉄」であったことを知ります。腐葉土が作るフルボ酸鉄が、川から海に注ぎ、海の生き物を育んでいたのです。

鉄？そうです。人間も貧血になったら、慌てて鉄分を取りますよね。カキ養殖を継いだ著者は、豊かな海をつくるため「森は海の恋人」のキャッチフレーズで木を植える漁師としても有名になりました。自然の循環を大きく捉えることで真の豊かさが生まれることに気づいたのです。

先の震災で、宮城にあった著者の養殖場は流され、お母様の命も奪われたそうです。間もなく3年がたちますが、被災地の復興はまだ終わっていません。森と海のように、都市と地方が手を携え、再生に向かっていければと願います。

（浦安市立中央図書館司書　大宮祐子）